（様式４）

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和２年３月３１日

グループ名	先進校教育研究会	フリガナ 代表者氏名	オノムラ ヒロシ 小野村　浩
学校名 （代表者）	東京都立千歳丘高等学校	電話番号	０３－３４２９－７２７１
研究テーマ	「アクティブ・ラーニング」の研究―社会の変化に対応できるような授業内容・進路対策・進路指導・生活指導等の研究―		
研究期間	平成　２９年４月１日　から　令和２年３月３１日　まで		
研究結果 の概要 ※詳細は別紙により報告	本校は７７年の歴史をもつ全日制普通科の都立高校である。７７年間には様々な変化や浮き沈みを経験したが、近年は生活指導上の課題や生徒の基礎学力不足の課題に直面し、入学者選抜の応募倍率の低迷にも悩まされた。そんな中にあって、令和元年１１月に新校舎が完成し、さらに新しい一歩を踏み出すことになる。 こうした状況の中、年々変わっていく社会や子どもたちたちの変化に合せて、教育も教員も対応し変化して行かなければならない。そのために本校では、近年若手教員の先進校視察を積極的に実施してきた。先進校の様々なタイプの学校の取り組みを吸収して、刺激を受けながら「新しい千歳丘高校」を創造するため、本研究に取り組んだ。 別紙報告書は、これまでに実践してきた取り組みについて、特に「アクティブ・ラーニング推進校」としての研究を中心にその成果をまとめたものである。		
その他 特記事項	都立千歳丘高校・「アクティブラーニング推進委員会」編集。		

アクティブ・ラーニングの研究―社会の変化に対応できる授業内容・進路対策・進路指導・生活指導等の研究

先進校教育研究会

１　研究開発の概要及び成果と課題

（１）　研究開発の概要

本校は、入学してくる生徒の学力差が大きく、低学力に悩む生徒も多い。学習に対する意欲や基礎学力の不足から授業中に寝てしまう生徒もいる。学習に対して自信がもてない生徒が多く、「学ぶことが楽しい」ことと知らない生徒や「学ぶことの楽しさ」を味わえない生徒もいる。さらに、構成する教員の約 25%が、１年目から４年目までの１校目教員で占められている現状がある。そこで、【◎生徒の学習に対する意識を高めた学力向上◎授業に対する満足度の向上◎生徒の希望進路実現◎教員の授業力向上】という４つの目標を設定することにした。

具体的な取組内容として、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち　①「生徒が主体的に取り組む授業」「自分で考え、わかったと思える授業」をテーマにした研究授業および校内研修会の開催　②他府県の先進校視察及び他校の授業力の高い先生の授業を見学し校内研修会の実施という２つの具体的な取組内容を設定した。

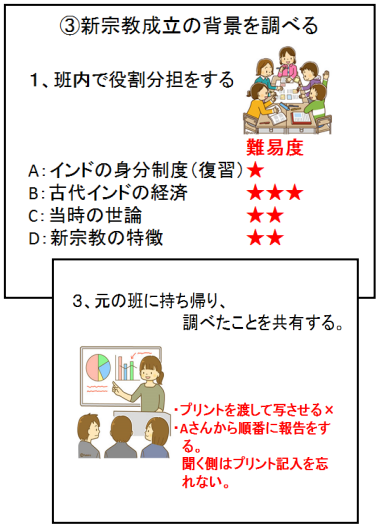
研究 1 年目、２年目では「生徒が主体的に取り組む授業」「自分で考える授業」をテーマに研究授業及び校内研修会の開催を予定していたが、若手教員が研究授業を行うことにとどまり多くの教員への広がりはなかった。３年目は「主体的・対話的で深い学び」の視点にたち　①「生徒が主体的に取り組む授業」「自分で考え、分かったと思える授業」に加えて「特別支援教育の視点を取り入れた授業」の実践及び校内研修会の開催　②「探究」の時間を中核とした教科横断的なカリキュラム開発している他府県の先進校視察及び校内研修会の実施という２点の具体的な取組内容を設定した。

（２）成果について

全教員の 93.3%がアクティブ・ラーニングの視点にたった授業を実施している。一斉授業の中でも、生徒と教師の双方向のやり取りをしている授業展開を、ＡＬの視点に立った授業と捉えると、全教員 100%が、取り組んでいるといえる。また「主体的・対話的で深い学び」の視点にたった授業を通年にわたり実践した教科もあった。先進校視察に４校訪問をした。１年目 11 校を視察、２年目９校、３年目４校を視察した。今年度は４回の校内研修会を実施した。特に第３回 12 月 12 日（木）の校内研修会では、外部の方５名も参加もあり、２時間にわたる研修は圧巻であり、アンケートから３学期及び次年度の研修テーマが明確になった。

２　教科ごとの取組実績例

▲ホワイトボードで発表



【　アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた単元開発、授業実践　】

３年　数学Ⅲ
高校数学の美しさを知ろう！

２年コミュニケーション英語Ⅱ
ペア音読

１年　地理Ｂ
2050 年のエネルギー構成

（３）　課題について

教育改革対策（旧ＡＬ推進）委員会の委員が、積極的に、計画・実践したことで、若手教員を中心に、委員でない先生方への輪が広がっており、中堅教諭が研究授業を実施するまでになったが校内全体で研究授業を実施するまでの広がりには至っていない。年度末に実施予定の「教員の取組アンケート」を活用し、次年度へつなげる。生徒の授業評価アンケート結果から、ＡＬ型授業に生徒が積極的に取り組んだ時やグループワークを積極的に参加した時に、主体的に授業に参加できた、理解できたと、生徒の授業満足度も上がっている。引き続き、定点観測を継続し、生徒を変容させていく。

３　校内研修

①　平成 29 年 11 月 20 日（月）

AL 校内研修会

「生徒にどのような資質・能力を身に付けてほしいのか？
そのためにどのような教育方法が必要か」

講師　立教大学経営学部　助教　館野　泰一　先生

本校生徒にどのような力が求められるのか、教科毎に、職員間のグループワークを交えてより具体的に考察し、生徒がこれからの社会で生きるために必要なことを講義形式で学んだ。また、アクティブラーニング的手法を用いることで、生徒にどのような効果があるかを考察した。

②　平成 30 年８月 15 日（水）1 時間 30 分

③　平成 30 年 11 月７日（水）11 月 28 日（水）１月９日（水）２月 27 日（水）（４回）

「主体的・対話的で深い学びとは何か」

学習指導要領の改訂、高大接続改革の大まかな内容を共有し、新学習指導要領のポイントである「見方・考え方」とは何か、各教科で考察した。また、普段の授業での工夫をそれぞれ「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」へと関連付け、新しい取り組みを行うのではなく、「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れて授業改善を行うことが重要であることを確認した。

「社会や職業はどのように変化し、教育には何が求められるか。　−そのためにどのような教育方法が必要か−」～ワークショップ形式で～

講師　立教大学経営学部　助教　館野　泰一　先生

「１００年時代の人生戦略」２００７年に生まれた日本人の半分が１０７歳まで生きるという予測の下、何歳まで働くのか、どんな時代になるのか。そのために必要な力とはどんな力なのか。教育にできることは何か。高校の現場では、各教科はどうように教えるのか。講義とグループワークを交えて、考察した。

④　先進校視察校内発表会

期間中の職員会議の中で全４回、ＡＬ委員が行った先進校視察の内容の報告を本校の課題を踏まえながら行った。他校での取組みと本校の実態の共有をした。他県ならではの特色や学校独自の取り組みは、今後の授業改善に有益であった。

４　授業改善に向けた成果と課題

① 生徒には「自ら考え動く、人間関係の構築、基礎学力の充実」などの力を身に付けさせることが必要であることを共有した。そのためには、アクティブラーニングの視点に立った授業（調べ学習、ＩＣＴ教材の利用等）における生徒一人ひとりが自ら考える機会を作ることが大切であるという認識を得た。また、大学においてもこれからの社会で活躍できる人材の育成に向けてグループワーク等を用いたアクティブラーニングの視点をとりいれた講義をしており、その様子を見ることで「生徒がこれからの社会で生きる力」の育成は、高大連携という視点から見ても非常に重要な課題であることを学んだ。一方で、実際の授業における実践例、活用方法に関してはまだわからない点も多く、先進校視察や授業観察などを活用し、具体的な実践方法を広く共有していく必要性を感じた。

② 各ＡＬ先進校では、生徒の実態や、学校ごとの方針に基づき、ＡＬ的手法や工夫を様々な場面で実際に活用している。それらの手法を見ていく中で、本校におけるアクティブラーニング型授業への取り組みのきっかけとして、活用できるものが多くあり、それらを共有していく。

(1)　８月 30 日「特別支援教育の視点を取り入れた授業改善」

(2)　10 月２日　「新しい大学入試の全体像　入試改革が求めているもの」

(3) 12 月 12 日　立教大学　舘野泰一　准教授　　探究学習を中核に考察する

「様々な困難や課題に遭遇した時に、主体的に乗り越えることができる。社会人としての良識を持ち、地域社会に貢献できる。」生徒を育てていくためには、どのような教育方法が必要か。

(4)12 月 25 日、１月 10 日　「発達障害教育の視点にたった探究学習とは」外部講師

・成果　特別支援教育、発達障害教育の視点を取り入れた授業研究を行うことで、視覚や聴覚等五感を使った授業を実践し、生徒の授業の理解度が向上した。第３回の外部講師を招聘した２時間の校内研修は、ワークショップ・グループワークが充実し参加者全員が満足できた。

・課題　どのようにして生徒に主体的に考えさせ、社会に貢献でき幸福な人生を送らせていけるのか。そのためにはどのような授業を実践すればよいのか。全教員で研修し授業改善を図る。

５　先進校視察

ＡＬ推進委員会の委員のうち５名が先進校を視察した。

①　静岡県立沼津城北高等学校

②　静岡県立韮山高等学校

③　広島県立安西高等学校

④　広島市立祇園東中学校

⑤　宮城県仙台第二高等学校

⑥　宮城県仙台第三高等学校

⑦　狛江市立第一中学校
⑧　大阪府立四条畷高等学校
⑨　大阪桐蔭高等学校
⑩　埼玉県立熊谷高等学校
⑪　愛知県立蒲郡高等学校
⑫　静岡県立静岡東高等学校
⑬　青森県立三沢高等学校
⑭　青森県立百石高等学校
⑮　愛知県立日進西高等学校
⑯　愛知県立豊田西高等学校
⑰　埼玉県立戸田翔陽高等学校
⑱　奈良県立登美ヶ丘高等学校
⑲　国立大学法人京都教育大学付属高等学校
⑳　広島市立美鈴が丘高等学校

６　生徒の変容

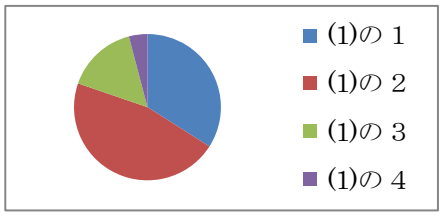
（１）授業に関するアンケートの実施（ＡＬ委員会　地理歴史科担当教員の授業）

今年度は１学期末に１学年２クラス、２学年２クラスの生徒に、授業のどの様な場面で意欲的・主体的に授業へ参加できているかの調査を実施した。

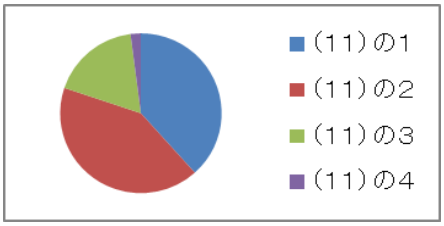
「アンケート内容」

		当てはまる ← → 当てはまらない			
(1)	先生の説明・解説を聞いているとき	①	②	③	④
(2)	視聴覚資料を見たり、利用したりしているとき	①	②	③	④
(3)	先生があなた自身に質問をしたとき	①	②	③	④
(4)	先生が他者や全体に質問をしたとき	①	②	③	④
(5)	黒板の内容をノートやプリントに写しているとき	①	②	③	④
(6)	メモを取っているとき	①	②	③	④
(7)	あなたが教科書を読んでいるとき	①	②	③	④
(8)	他者が教科書を読み、それを聞いているとき	①	②	③	④
(9)	個人で問題を解いたり、作業をしたりするとき（個人作業、自習）	①	②	③	④
(10)	ペア活動をしているとき（実験・実習・チームプレー・教え合い・話し合いなど）	①	②	③	④
(11)	グループ活動をしているとき（実験・実習・チームプレー・教え合い・話し合いなど）	①	②	③	④

項目１（説明・解説を聞いている時）



項目１１（グループ活動）



「アンケート結果内訳」

質問	①	②	③	④	質問	①	②	③	④
（1）	５０人	68 人	２３人	６人	（7）	３６人	５４人	４４人	１１人
（2）	６６人	５７人	２０人	３人	（8）	１８人	６１人	４７人	１７人
（3）	４４人	６９人	２３人	８人	（9）	５８人	６３人	２０人	４人
（4）	２９人	７０人	４０人	６人	（１０）	５１人	６９人	２１人	５人
（5）	６７人	54 人	20 人	５人	（１１）	５６人	６１人	２６人	３人
（6）	４０人	５９人	３７人	９人					

アンケートからわかること

・項目（１）と項目（１１）を比較すると肯定的な意見（①②）と否定的な意見（③④）いずれも大差がないことがわかる。このことから①一斉講義型 or グループ活動型どちらの授業形態がよいかという議論には意味がないことがわかる。また、（５）（９）のノート・プリントへの記入、個人作業に関して肯定的な意見が多いことも見逃せない。授業内での他者との関わりが注目されがちだが個人で黙々と課題に取り組んでいる状況も意欲や主体性の表れである。

　一方で（４）先生が他者に質問した時（８）他者が教科書を読んでいる時などは、自分が関わらないために意欲的ではない。

・項目（２）視聴覚資料の提示や利用が肯定的な意見①②に多く見られることがわかる。授業内でのＩＣＴ機器活用による教材提示の工夫が求められる。

（２）１学期に行ったグループワークや協働学習についての生徒の感想

・より深く理解できるなと思いました。
・友人と活動をすると印象に残って覚えることができた。分からないところも教えてもらえる。
・少し内容が難しいと話し合いをどうしたらいいかわからない。
・自分で発言し、意見を言うと覚えやすく身に付きやすい。
・先生の話を聞くのも大事だけど、皆からの発言を聞くことができて、テストの時に〇〇さんが言っていたな、と思い出すことができる。
・私は個人で集中してやることが得意なので個人での作業もたくさんやりたいです。
・私は個人よりペアやグループでの活動が積極的に参加できていいです。

※年度初めにアクティブ・ラーニング型授業の意味や、一斉授業の大切さを説明してある。

７　今後の課題

ア　授業方法について

　アクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、単元の中で、本時のねらいや身に付けさせたい力に応じてどの授業で、どの様な方法で授業を行うのか検討することは非常に有意義であった。このことから、年度初めなどに、生徒にも様々な授業形態や方法の説明をした上で、生徒の理解も得ながら行うことが重要であると考える。特に班やペアなどの学習を行うには、そのための準備、知識や技能などの習得の時間をしっかり確保することが重要である。また、班での話し合いなどの対話的な学びには様々な方法があり、生徒も教員も一朝一夕でできるものではない。１年次より多教科にわたり繰り返し行っていき、定着させる必要がある。

イ　評価について

　ルーブリック評価を取り入れた授業実践では、事前に提示することで生徒の積極性の向上につながったが、「学びに向かう意欲」の評価をどのような基準で評価するかについて、さらに考えていかなくてはならない。班学習の際に教員一人で机間指導を行い、生徒一人一人を観察することの難しさもそうだが、積極的に発言はしなくても、記述する内容は非常に内容が濃かったり、逆に積極的に発言はするが、記述は全くできなかったり、何をもって意欲とするか、検討が必要である。

８　次年度以降の取組

①　「千歳丘の探究学習」を確立させ、新教育課程編成を行う。
②　本校の実態に即した「深い学び」の研究し、現在の研究を継続する。
③　若手教員を中心に研究授業を実施・研修をする。校内研修会には、外部から講師を招聘する。
④　ルーブリック評価を取り入れた授業実践、評価方法を協議し、作成する。